

山本覚馬―語られない同志社の大恩人―

奨励	鈴木 直人〔すずき・なおと〕
奨励者紹介	同志社大学名誉教授

毎日のように、ダビデを助ける者が加わり、ついに神の陣営のような大きな陣営ができた。

(歴代誌上 12章23節)

皆さん、こんにちは。今年の3月に心理学部を定年退職した鈴木です。

この同志社スピリット・ウィークは15年ほど前、私がキリスト教文化センターの所長をしていた頃、越川先生とここにおられる三木先生とで相談して始めたものでした。同志社は私学です。志をもった大学です。しかしながら入学式でやれ新島だ、建学精神だという話を聞かされた後、次にそのような話を聞くのは卒業式という風化した現状を何とかしたいというのがその意図でした。同志社科目の設置も同じで、当時の田端教務部長に提案して開講されるようになったものです。

山本覚馬って

それはともかくといたしまして、今日は、同志社スピリット・ウィークの中のチャペル・アワーですので、「山本覚馬―語られない同志社の大恩人―」という題で奨励を行うことにしました。

皆さんは坂本龍馬を知っていらっしゃると思います。坂本龍馬は、よくテレビでも取り上げられますし、司馬遼太郎の『龍馬がゆく』など多くの小説にもなっていますので、よほどの歴史音痴でない限り、龍馬を知らない人はいないのではないかと思います。

では山本覚馬はどうでしょう。彼の名前や彼の行ったことを知っている方は手を挙げてみてください。

作家の中村彰彦氏は『歴史街道2013年4月号』に、「私は、土佐の坂本龍馬がドラマや小説で取り上げられるたびに、『遙かに格上の男が会津にいたのに』と、常々感じていました」と書かれています。さらに、氏は、「龍馬の『船中八策』が『どんな体制の国をつくるか』という理念を述べた、いわば『総論』に留まっていたのに対し、覚馬の『管見』は大きなビジョンを掲げた上で、各分野で何をすべきか、具体的な方策を説く『各論』までを打ち出していたのです。その内容の充実ぶりに仰天したのが、新政府の西郷隆盛や岩倉具視らでした。彼らが瞳目したのも無理はありません。『討幕』にのみ心を奪われ、新国家の形も未だ手探りであった西郷たちにすれば、敵方の会津藩士が、目指すべき『近代日本のあり方』を明示したことに、ただ驚くしかなかったのです」と述べられています。

こういう人物であり、また同志社にはなくてはならない人物であったにもかかわらず、同志社では、湯浅八郎やディヴィス、徳富蘇峰などが語られることはあっても、山本覚馬が語られることはほとんどありません。

同志社で白眼視される山本覚馬

私は、2008年に「同志社って、誰がつけたの?」と題して同志社スピリット・ウィークで奨励を行いました。その時も、なぜ同志社で山本覚馬は白眼で見られてきたのか知っている人は教えてくださいと投げかけましたが、今日にいたるまで教えてくださいる方はいらっしゃいません。それどころか、今でも「山本覚馬って誰」、「聞いたことはあるような気がするが、どんな人物か知らない」という同志社の教職員、学生、卒業生が案外多いのではないかと思います。

同志社社史資料センターの『「新島遺品庫より」コレクション5 伝山本覚馬所用長巻(注)』の一節を引用すると、「2013年に放映されたNHK大河ドラマ『八重の桜』で、脚光を浴びた人物のひとりが山本覚馬である。しかし、覚馬は全国においては言うまでもなく、京都、さらには同志社においても、その知名度はさきわめて低いと言わざるをえなかった。また、その名前を知っていたとしても、覚馬の事跡を詳しく知る人々は決して多くはなかったのではないだろうか。(中略)

ところが、覚馬に関する資料は、その活躍とは比例せず、公文書を除けば、ごくわずかで、その他の資料の所在はわかっていない。同志社においても、覚馬に関する資料はごくわずかしか残っておらず、さらに覚馬の直筆と確認できる資料は今のところ同志社には存在しない。これは、覚馬が盲目であったことに起因すると考えられるが、新島襄などと比べてこれまで積極的に資料の収集を行ってこなかったことも一因であろう。ともあれ、覚馬にまつわる資料収集は今後取り組みねばならない課題となっている」と記されています。

「八重の桜」で、八重さんの兄上である西島秀俊氏演じる山本覚馬はかなり大きく取り扱われており、このドラマで山本覚馬を知った同志社関係者は多いのではないかと思います。覚馬のファンであった私は、大いに留飲下げたものでした。実を言いますと、つい1時間前、今年の同志社エンタープライズ作成の同志社カレンダーに山本覚馬の写真と言葉が記されているのを見つけました。これも「八重の桜」の影響でしょうか。

山本覚馬と同志社

山本覚馬と同志社との関係に限って言えば、覚馬は明治維新後に購入していた同志社の現今出川キャンパス、即ち旧薩摩藩邸跡約6000坪を、新島に同志社英学校の開校用地として寄付しました。そして「同志社」の名付け親も覚馬です。また、覚馬は当時の英学校開校で横村正直知事を動かしたばかりか、新島と連名で「私学開業願」を文部省に出願し、女子大学の前身である女紅場の開設にも尽力しています。キリスト教を前面に出した学校は許可できないと府から言われ暗礁に乗り上げた時、一旦キリスト教を切り離れた形で英学校の開校に導いたのはネゴシエーションに長けた覚馬の知恵であったであろうとも言われています。さらに、彼は新島襄の死後、臨時総長も務めた人物です。まさに、現在の同志社があるのは覚馬を抜きには語れないと言っても過言ではありません。比べるべきものではないでしょうが、私はディヴィスやラーネッドなどよりも、あるいは徳富蘇峰よりも同志社にとって功績のある人物であると思いますが、いかがでしょうか。同志社の建物をご存知のように、聖書から取った言葉や同志社にかかわる事柄、功績のあった人物の名などが付けられています。しかし、覚馬の名を付した建物はありません。なぜ、山本覚馬は白眼視されるのでしょうか。不思議の一言です。

山本覚馬の略歴

山本覚馬は、会津藩の砲術指南役の山本権八の長男として生を受けました。ウィキペディアによれば、武田信玄の軍師であった山本勘助の末裔だそうです。江戸詰めになってからは藩命により佐久間象山の塾で蘭学や洋式砲術を学び、また勝海舟にも学び、会津藩の近代化に取り組みました。

蛤御門の変で砲兵隊を指揮し、長州藩を撃退はしましたが、この戦いで目を負傷し、また持病の白内障が悪化し、数年後には失明してしまいました。1868年の鳥羽・伏見の戦いの際に薩摩藩に捕らわれ、薩摩藩邸、現在の今出川校地に幽閉され、この幽閉中に有名な建白書、通称『管見』を口述筆記させ、薩摩藩主島津忠義に上程しました。この『管見』は、新政府がどうあるべきかを説いたもので、23項目からなり、天皇統治下における三権分立や二院制の必要性の他に、富国強兵策、人材教育を政治の中心に据えるべきであるとか、商工業の振興策や、男子と同様の女子教育の必要性、世襲制の廃止、種痘の普及や性病の対策、お寺を小学校にして一般の人が通えるようにすることなど、政治の体制から廃刀策まで、非常に幅広いビジョンが具体的に述べられています。この中でも覚馬が強調したのは、「あたらしい産業や文化をおこす根本は、教育にある」と述べているように、特に教育の必要性和モノづくりの必要性でした。

明治維新後、覚馬は京都府の顧問に推挙され、横村知事の下、日本最初の内国勧業博覧会を開催しました。また、京都の町衆の手によって作られた日本で最初の学区制小学校である番組小学校64校の設置にも努力しました。顧問を解かれた後は、京都府会の初代議長、京都府商工会長をも務め、まさに覚馬は近代京都の先駆者ともいうべき、創造性に富んだ人物でした。

同志社の設立

なぜ、覚馬が新島のキリスト教思想による学校創立に協力をしたかということ、新島に会う直前、アメリカの宣教師ゴルドンからもらった『天道溯源』というキリスト教の教義を解説した本に感銘を受けていたことによるようです。覚馬は、新島のキリスト教こそがこれからの日本人の心に必要であり、日本の進歩を促進する力になりうるとする考え、また、キリスト教主義教育で自由、自治、自立の良心をもった人物を涵養したいという考えに、わが意を得たものと思われます。このような人物をなぜ同志社は語らずにきたのでしょうか。

覚馬が同志社で語られなかった理由の一考察

ここからの話はあくまでも私の勝手な、エビデンスの無い、いわば妄想です。そのつもりで聞いていただきたいと思います。

まず第一の理由は、覚馬は、禁門の変で目を負傷し、盲目になってしまい、また、脊髄を痛め、晩年は歩行も困難だったことです。

そのため、書物を残すようなことはできず、有名な『管見』も口述筆記でした。また彼は同志社の教壇に立つことはなく、影の支援者に徹していたことが関係していたのかもしれませんが。しかしこれだけでは、同志社で覚馬が語られない理由にはならないだろうと思います。

一番の原因は、覚馬が会津藩士であったことによるものではないかと思います。京都は判官びいきの土地です。天皇の住まいのあったところですよ。300年に渡る幕府による支配、新撰組による勤王派の弾圧、その後ろ盾としての守護職にあった会津の藩士であるという彼の立場が関係していたのではないのでしょうか。会津と敵対した薩摩では今でも山本覚馬の名はよく知られていると聞いたことがあります。しかし、長州藩にとっては憎き禁門の変の敵の大将です。覚馬と薩摩藩との関係に比べ、覚馬と長州藩の関係に触れられたものはほとんどありません。私学同志社が英学校から大学へと変わっていく中で、長州藩の多い明治政府に遠慮せざるを得なく、覚馬の存在を表に出さないようにしてきたものかもしれません。

また、建学当初、熊本バンドの面々が同志社を席卷していたことも関係あるかもしれません。当初、徳富蘇峰一派は、八重さんを鶴と呼ぶなど、旧幕府の中心的存在であった会津に対する反発があったのではないかと推測します。そのため、会津の代表のような覚馬という存在を無視したのかもしれませんが。さらに、覚馬があまりにも優秀であったがゆえに、同志社にとどまらず、京都府の重鎮であったことが関係しているかもしれません。蜜からな熊本バンドの学生たちは、八重さんの行動と共に、そのことをよく思っていなかったのかもしれない。

第三に、明治維新後の京都は、任侠でもあった会津の小鐵の存在が、京都民を震え上がらせていました。青山霞村先生の『山本覚馬伝』によれば、この会津の小鐵という人物は会津の出身ではなく大阪の出身のようです。ただ、彼を育てたのが大澤某という会津藩士で、毒蛇にかまれた同志社の学生が小鐵の家に運ばれ治療を受けたというエピソードや小鐵の世話になった後、牧師になった学生がいたなどの話もあるため、同志社とはまんざら縁がなかったわけではないようです。覚馬がこの会津の小鐵と何らかの関係があったと考えることは無理がないように思います。こうした反社会的な人間との交際が関係していたのかもしれませんが。『山本覚馬伝』もその出だしがこの会津の小鐵のエピソードから始まっているのは何を意味しているのでしょうか。

同志社精神の根底

私は、同志社の精神的支柱の根底を築いたのは覚馬そして八重さんの会津魂ではなかったかと思うことがよくあります。新島も武士の出身ですが、彼はアメリカの生活で、アメリカナイズされていました。八重さんとの数々のエピソードなどはそれを物語っています。新島の情熱だけで、現在に至る同志社が出来たのかというと、そうではなく、有名になった「ならぬことはならぬ」という原則を曲げない会津魂、そしてアイディアマンの山本覚馬の東洋風の思想が根底にあり、それが新島の西洋風のキリスト教精神、科学的精神と融合したのが同志社精神ではないかと思います。いずれにしろ私の妄想です。根拠はありません。勝手な話をしてしまいました。お許ください。

(注) 2013年から学内外の企画展で出陳されていたこの長巻一振に関しては、その後の調査の結果覚馬の所用物ではないことが判明し、2015年3月23日当時の村田学長名でその旨が公表されています。しかしながら奨励者は長巻が覚馬所用の一振ではなかったとはいえ、これに付されていた覚馬に関する説明文に誤りはないと考え、敢えて原文のまま引用することといたしました。

2018年10月31日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録

※図の表示はホームページでは省略します。